

# イタリア議会での市長演説

## 【目次】

### 冒頭の挨拶

#### I 被爆の実相と被爆者のメッセージ

- 1 被爆前の広島
- 2 被爆の実相
- 3 ヒバクシャの思い

#### II 広島市や平和首長会議の取組

- 4 平和首長会議
- 5 被爆体験継承・次代を担う若者
- 6 平和首長会議の新たな展開

#### III 核軍縮の現状と今後の取組

- 7 核兵器禁止条約
- 8 今後の取組み

#### IV 核兵器廃絶に向けた訴え

- 9 為政者へのメッセージ

### 冒頭の挨拶

皆様こんにちは。ただ今、御紹介いただきました広島市長の松井一實です。ラウラ・ボルドリーニ下院議長様を始め、ダンブルオーゾ伊日友好議員連盟会長、イタリア国会議員の皆様。アントニオ・デカロ イタリア自治体協会会長を始めとするイタリア自治体の首長様、そして今回の機会をつくっていただいた関係者の皆様。本日は、被爆地ヒロシマからのメッセージをお伝えするという光栄かつ貴重な機会を与えてくださり、ありがとうございます。

これから、被爆地広島から皆さんにお伝えしたいこと、私たちが現在、取り組んでいる核兵器廃絶に向けた活動についてお話させていただきます。

まず最初に、被爆前の広島の街や市民の暮らしがどのようなものであったか、そして被爆後の広島はどのような惨状であったか、順にたどりながら、お話させていただきます。

#### 1 被爆前の広島

- ・ 原爆投下前、当時の「広島県産業奨励館」、現在の「原爆ドーム」は広島市中心部に建っており、その近くの相生橋というT字型の橋が、原爆投下の目標となりました。
- ・ 産業奨励館の周辺は、江戸時代から城下町として、大小の商家が軒を並べて賑わっており、職人や医師など、多くの人々の暮らしがありました。

- ・ 世界から多くの人々が訪れる現在の平和記念公園がある中島地区は、被爆当時は川に囲まれた街で、住宅が立ち並び、銀行や映画館もある賑やかな繁華街でした。1945年（昭和20年）頃の広島には、近郊に多くの人々が疎開していたので市全体で35万人前後の人口となっていたと考えられています。多くの成人男性は出兵していたため、その約9割は老人、女性、子供たちでした。
- ・ 市内の川ではいつも多くの子供たちが無邪気に水と戯れていました。72年前の暑い夏の「あの日」までは。

## 2 被爆の実相

- ・ 1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分、広島市は人類史上初めて原子爆弾による攻撃を受けました。このきのこ雲の下では、罪もない無数の市民が命を奪われ、負傷し逃げまどい、生死の境をさまよっていたのです。
- ・ 原子爆弾による熱線・爆風、火災により、爆心地から半径2キロメートル以内の木造家屋は全壊又は全焼しました。戦国時代に築城された国宝の広島城は、跡形もなく崩れ落ちました。
- ・ 被爆後、焦土と化した広島は、「75年は草木も生えぬ」と言われる状態になりました。
- ・ 上空9,600メートルから投下された原子爆弾は、原爆ドームから南東約150メートル、高度600メートルの地点で爆発しました。原爆ドームは、辛うじて倒壊を免れました。
- ・ 被爆前、川に囲まれた繁華街だった現在の平和記念公園周辺は、一面の焼け野原となりました。
- ・ 原子爆弾の爆発の瞬間、爆発点は数十万気圧という超高压となり、まわりの空気が急激に膨張して衝撃波が発生し、その後を追って強烈な爆風が吹き抜けました。爆心地から半径2キロメートルまでの地域では、爆風により木造家屋はほとんどが倒壊し、鉄筋コンクリート造の建物も、崩壊はしないものの、窓は全部吹き飛ばされ、内部はことごとく焼失するなどの大きな被害が生じました。
- ・ 爆発と同時に爆発点の温度は摂氏100万度を超え、爆心地周辺の地表面の温度は摂氏3,000～4,000度にも達しました。さえぎるものがないまま熱線の直射を受けた人は、皮膚が焼き尽くされ、体内の組織や臓器までも傷害を受け、そのほとんどが即死または数日内に死亡しました。また、半径2キロメートル以内にいた人々の多くが動くことができないほどの火傷を負いました。
- ・ たった一発の原爆により、幼子からお年寄りまで一日で何万という罪なき市民の命が奪われました。1945年（昭和20年）の年末までに、約35万人の人々のうち約14万人もの人が亡くなりました。
- ・ 現在の広島は、緑にあふれる、美しい佇まいの街となっていますが、あの日「絶対悪」に奪い去られた川辺の景色や暮らし、歴史と共に育まれた伝統文化は、二度と戻ることはないのです。

### 3 ヒバクシャの思い

「絶対悪」である原子爆弾は、一瞬のうちに街を焼き尽くし、立ち昇ったきのこ雲の下で、多くの朝鮮半島出身の方々や、中国、東南アジアの人々、米軍の捕虜などを含め、子どもからお年寄りまで罪もない人々を殺りくしました。辛うじて生き延びた人々にも、放射線障害や健康不安など、心身に深い傷を残し、社会的な差別や偏見を生じさせ、その人生をも大きく歪めてしまいました。被爆者は、辛く厳しい境遇の中で、怒りや憎しみ、悲しみなど様々な感情と葛藤し続けてきました。

そして苦しみながらも、恩讐や心の葛藤を乗り越え、「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」という思いを根底に、被爆者は核兵器廃絶に向けた活動の先頭に立ってメッセージを発信しているのです。

### 4 平和首長会議

被爆の実相を踏まえ、被爆者の思いを受け止めて、原子爆弾により、市民が一瞬にして天国から地獄の生活に突き落とされたこの悲劇が二度と繰り返されることのないよう、核兵器廃絶に向けた活動を展開しているのが、私が会長を務める平和首長会議です。その設立経緯や活動について述べさせていただきます。

1982年に、当時の広島市長が、ニューヨークの国連本部で開催された第2回国連軍縮特別総会において、世界の都市が国境を超えて連帯し、ともに核兵器廃絶への道を切り拓こうと提唱し、長崎市長とともに世界各国の市長に向けてこの計画への賛同を求めました。平和首長会議は、この趣旨に賛同する自治体で構成された機構で、1991年には国連経済社会理事会のNGOに登録されています。

設立から35年が経ち、現在では、加盟都市は162か国・地域の約7,500都市に上り、その人口は世界の総人口の約7分の1にあたる10億人に及んでいます。イタリアでは495都市に加盟いただいております、世界で4番目に加盟都市が多い国となっています。今後も国際社会においてより大きな力となるよう2020年までに1万都市の加盟を目標としています。

平和首長会議は、規模が大きくなり、知名度も高まりつつある中、各地域の特性に応じた主体的・自主的な活動をしていくことが重要となっています。こうしたことを念頭に置き、平和首長会議の使命と役割について御説明いたします。

まず、第一の使命は、世界のより多くの人に平和への願い、思いを共有してもらいながら加盟都市を増やし、構成員を拡大することです。続いて、第二の使命は、国家に影響力を与えることができる国連に協力を要請し、その力を借りて世界の諸問題に直接携わる国家に対して、平和の思いを届ける事です。さらにこれらを補完するため、平和首長会議の加盟都市が未加盟都市や自国や他国の政府へ働き掛けるとともに、NGOや国際的な平和機関と連携して為政者へ働き掛けています。平和首長会議は、被爆者の

思いを世界中に広め、核兵器廃絶に向けた取組を広げてもらうために活動する超党派の組織として、直ぐには成し得られなくとも、熱い思いを常に心に抱き、忍耐強く (E: endurance)、はつらつと (R: resilience) 寛大な (G: generosity) 略して E R G 精神と、人間愛を持って、連帯して行動していきます。

## 5 被爆体験継承・次代を担う若者

被爆者の思いに裏打ちされた核兵器廃絶に向けた活動を展開していく一方で、被爆者の平均年齢は 81 歳を超えており、次代に継承していくための取組が不可欠となっています。広島では、被爆者の思いや被爆の実相を「守り」、「広め」、「伝える」取組を被爆地の使命と考え、被爆建物の保存や平和記念資料館の整備等、被爆体験を継承するための取組を強力に進めています。

これまで、イタリアから広島には、昨年、G7 広島外相会合で当時の外相としてパオロ・ジェンティローニ首相に御訪問していただいたほか、同じく昨年、G7 下院議長会議のため来日されたラウラ・ボルドリーニ下院議長にも御訪問いただいています。また、毎年、原爆が投下された 8 月 6 日に開催している本市の平和記念式典には、近年、毎年のようにイタリア大使に御参列いただき、原爆死没者の霊を慰め、世界の恒久平和を祈念いただいています。イタリアの皆様を始め、今後も世界の多くの人々に訪れていただき、被爆の実相を見て、被爆者の証言を聴いていただくことを願っています。

また、平和首長会議では特に次代の平和活動を担っていく青少年の平和意識の啓発に力を入れています。例えば、広島で被爆の実相や被爆者の思いなどを学び、交流を体験するプログラムでは、参加する若者の派遣元加盟都市の活動報告や、今後の取組の議論等により、若者がそれぞれの都市で主体的に核兵器廃絶に向けて取り組んでもらえるように支援しています。

また、世界各国の大学へ広島・長崎の悲劇を伝える「広島・長崎講座」は、現在、日本国内 49 大学、国外 21 大学の合計 70 大学で開設されており、引き続き未開設の大学に働き掛け、若者が被爆地を訪れ、被爆の実相に触れる現地学習の機会を提供していくこととしています。

## 6 平和首長会議の新たな展開

また、平和首長会議では、最終目標である世界恒久平和の実現に向けて、世界の人々と共に行動していくため、各都市が抱える、テロ、難民、環境破壊、貧困、飢餓、差別、暴力といった、地域の安全にかかわる多様な課題の解決に向けても活動を展開することとしました。今後は、今夏策定した 2020 年までの行動計画において、「核兵器のない世界の実現」と今申し上げた「安全で活力のある都市の実現」の二つに取り組みながら、国際世論の醸成・拡大を図っていきます。

イタリア、そしてEUにも我々の取組が広がり、世界恒久平和に向けた協働の輪が広がっていけばと希望していますので、皆様の御支援を頂ければと思います。

## 7 核兵器禁止条約

こうした中、国際社会では、今年7月に122か国が賛成して核兵器禁止条約が採択されました。この条約が採択されたことは、あらゆる核兵器の廃絶に向けた新たな進展を意味し、「核兵器という非人道的な兵器は禁止すべき」という価値観が、国際社会において広く認められたものと受け止めています。今後は、核兵器廃絶に向け国際社会が総力を挙げて協力し、この条約を十分に法的実効性を持つものへと育てていくことが必要だと考えています。

今から約半世紀前、NPT・核拡散防止条約が発効し、核軍縮・不拡散の軸となってきましたが、現実には、核保有国の軍縮は停滞しています。原爆投下から72年、依然として世界には約1万5,000発の核兵器が存在し、その9割以上を保有するアメリカとロシアの関係改善の見通しは立っていないばかりか、核兵器を持つ国は増え、その近代化も進められています。

その上、北東アジアでは、核保有国としての認知を迫り、核実験や弾道ミサイル発射を繰り返す国がある一方で、核抑止力を最大限に使い、それを抑え込もうとする国があります。

また、核戦争や核爆発に至りかねない数多くの事件や事故が明らかになり、テロリストによる使用も懸念されています。私たちは、広島が体験した地獄が再び生じかねない危機から、脱していない状況にあるのです。

こうした核軍縮・不拡散が進展しない状況の中でできたのが核兵器禁止条約であり、先月にはこの条約制定に向けてキャンペーンを展開してきた国際NGOのICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）のノーベル平和賞受賞も発表されました。ICANは、「この賞は広島、長崎の被爆者のためのものでもある」との声明を出され、これまでの被爆者の活動に対する評価でもあるとの認識を示していただきました。ICANのノーベル平和賞受賞は、世界中の人々が、被爆者と共に更なる行動を起こし、世界の為政者による核兵器廃絶に向けた取組を促す契機になると期待しています。

## 8 今後の取組み

核兵器の力を利用しようとする動きと、核兵器禁止の動きのどちらが真に人々の生活、人類の平和につながる在るべき姿なのか問うまでもないと思います。

「核兵器のない世界」こそが、将来のあるべき姿ではないでしょうか。核兵器禁止条約は、「核兵器のない世界」の実現へ向けての重要な一歩であり、これまで、軍縮・不拡散を確実に行うための実践的な核軍縮措置として制定されてきた、NPTやCTBT（包括的核実験禁止条約）と矛盾するものではありません。

現実的な方向性の更にその先をにらんだ時間軸の中では、既に発効し、締約国に誠実な核軍縮の交渉を義務付けているNPTや、残り8カ国の批准が得られれば発効する段階のCTBTは、「核兵器のない世界」の実現を目指すための手段です。私は、これらを着実に取り組んだ次のステップとして核兵器禁止条約への加盟があり、核兵器禁止条約は、「核兵器のない世界」を具現するうえで不可欠の条約であるということを各国政府の皆さんと共有したいと考えています。

現実的な手順を踏みながら、核兵器は違法であり、無くしていくという最終目標を目指す。その最終目標を忘れないために、誠実で忍耐強い対応をし続けることが重要であると考えます。

そのためには、為政者も核抑止に依存する政策に頼らない大きな決意が必要です。核抑止に依存した政策は、国際社会の問題を一時的に解決したように見えても、決して根本的な解決にはなりません。為政者には、国家のための安全保障ではなく、「人類愛」や「寛容」の精神の下に核抑止政策と決別し、より長期的な視点に立って核兵器に頼らない人類のための安全保障を目指していくとの認識を持っていただきたいと願っています。広島市と平和首長会議は、世界の為政者が勇気と洞察力を持って行動でき、市民社会もそうした為政者を後押しするような環境作りをしていきます。

## 9 為政者へのメッセージ

各国政府には、自国のことのみ専念して他国を無視することなく、共に生きるための世界をつくる責務があるということを自覚していただいた上で、互いに相違点を認め合い、その相違点を克服するための努力を「良心」に基づき、「誠実」に行っていただきたい。

我々の未来のため、また子や孫たちのため、核兵器のない平和な世界をつくって残していくために、共に歩んでいただけることを心から願います。

最後に、イタリア国会議員の皆様には、平和首長会議の趣旨を御理解いただき、イタリア国内の加盟都市を増やすことに協力していただければ有り難い。

本日、御列席の皆様の御健勝と御多幸を祈念して、私の講演を終わらせていただきたいと思います。